

力石咲 ステイトメント

これからどんな時代になろうとも、編むという自分の有する技能で生き抜いていく、というテーマで作品を作っている。

2020年コロナウイルスが蔓延した時期、山の中でそこにある素材を編んで生活をしてみる、という実験的作品によって編むという技術の可能性を再認識した。

2022年ウクライナ侵攻で、女性たちが身の回りにある布を裂いて編みカムフラージュに役立てたというニュースを目にして衝撃を受けるとともに、それは確信に変わった。

未来、目覚ましい技術革新の先に宇宙に住む時代がやってきても、自分の手で作り出すということは生きていくためのミニマルな行為であると思う。編み物はその際たるものではなからうか。

縄文人は身の周りがあった植物を編んで生活用品を作った。現代を生きる人の周りにもたくさん繊維があり、人体自身も繊維の集積であるが、一番身近な繊維は糸であると思う。人は、生まれてから死ぬまで衣服を身につけているからだ。しかも服を作るために糸は有り余るほど作られていて、世界中のニット屋の倉庫には日の目を見ない糸が眠っているらしい。また、糸や服の大量廃棄、糸の製造に必要な広大な土地や大量の水の使用、製造過程で生じる汚水やCO2の排出は地球環境やフードセキュリティに負荷をかけており、この産業は世界第2位の環境汚染産業と言われている。

これまでの作品に使用してきた1トンもの糸を倉庫に保管しており、そのおびただしい物量に囲まれている私にとって、これらの問題は自分ごととして感じられる。と同時に、編んだり解いたりと繰り返し素材を使用することができる編みものは環境にも優しい素晴らしい技術だと、希望を見出す。

だから私は、どんな過酷な環境下に放り出されても、最後まで自分のそばに残るであろう糸さえあれば自分の手で編むという技能を活用して生活を営み、生き延びて行けるだろう、生き延びていきたい、と思っている。編まれてはほどかれを繰り返し、何周にも渡って使い込まれた倉庫の無数の糸を前にする時、私は次のようなことを想像する。宇宙のちりが集まって地球ができたように、私は地球に無数に存在する糸を編んで世界を構築する。そこでの暮らしが終わったらほどいて、また次の場所で編んで新しい生活を構築していく。

編みものは母から教わった。その時は趣味的な感じでマフラーを編んだが、母が亡くなったことがきっかけとなり、それから自分の人生と編みものがリンクしていったように思う。私は自分が経験してきたことからしか作品を作ることができないので、生きていながら、生活と結びついた作品が作りたいと思うし、元来生活のための技術であった編みものでそれができると確信している。これからは生きていくための必需品である衣食住という要素にもより深く関わる作品を展開したい。来たる非常事態に備えた実験や提案をアートとして発表していきたい。